

桑名港の「みなと文化」

西羽 晃

目 次

第1章 桑名港の整備と利用の沿革.....	52-1
1. 諸方往還の津.....	52-1
2. 物資流通と東海道の港として.....	52-2
3. 幕末から近代化へ.....	52-3
第2章 「みなと文化」の要素別概要.....	52-6
1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」...	52-6
(1) 住吉神社.....	52-6
(2) 絵馬.....	52-6
(3) 豪商.....	52-6
2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」.....	52-6
(1) 廻船問屋・蔵宿.....	52-6
(2) 米会所.....	52-6
(3) 倉庫.....	52-7
(4) 船会所・船番所.....	52-7
3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」.....	52-7
(1) 漁業.....	52-7
(2) 木製品.....	52-7
(3) 醸造業・食品加工業.....	52-7
(4) 萬古焼.....	52-7
(5) 鋳物.....	52-8
4. 港を介して蓄積された経済力に基づき、 人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」.....	52-8
(1) 料亭・廊.....	52-8
(2) 文人の来遊・俳諧.....	52-8
(3) 石取祭.....	52-9
(4) 石取会館・桑名市博物館.....	52-9
5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」.....	52-9
(1) 七里の渡し場跡.....	52-9
(2) 赤須賀地区（漁港）の家並み.....	52-10
(3) 慶長の町割.....	52-10
(4) 歴史的建物.....	52-10
第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き.....	52-12

所在地：三重県桑名市

港の種類：港湾

港格：地方港湾



【位置図】



【現況写真】(三重県県土整備部 港湾・海岸室)

第1章 桑名港の整備と利用の沿革

1. 諸方往還の津

桑名は木曾・長良・揖斐の三大川が伊勢湾に注ぐ河口に位置しており、また伊勢と尾張を結ぶ水陸交通の接点として発展してきた。古代にあっては、後の桑名港よりも、やや上流にあたる多度地区（現在は桑名市に含まれる）が伊勢から尾張への渡し場であった。伝説的であるが、ヤマトタケルが尾津浜（多度地区）から尾張へ渡っているし、延喜式では東海道は伊勢榎撫から尾張馬津への渡船とされている。多度大社は伊勢平氏の信仰を集めており、平氏水軍との関わりも想像される。

三大川の下流部は次第に土砂が溜まり、州が形成されるようになった。平安時代の中頃から下流の桑名が陸地化して、人々が住み着くようになった。その様子は「袖野山見聞記」(『桑府名勝志』所収)によると、

或人ニ桑名ノ昔ヲ伝聞ニ、古ヘ桑名ノ地境西方東方ト別レシ。其中ニモ西方ハ地高シテ諸民住居シテ往還海道ナリ。東方ハ其頃迄ハ未タ洲崎渺茫トシテ民家甚稀ナリ。今ニ於テ船着明神アリ。然レハ洲崎タルコト疑ナシ。其昔洲崎三ツニ分レタリ。北ヲ自擬洲崎トイ、南ヲ泡洲崎ト云、其中間ヲ烏洲崎ト云。纔ニ農漁ノ住居ナリシニ、イツシカ諸民繁昌シテ、カノ三ノ洲崎モ名残ルノミニシテ、桑名三ヶ村トイヘル頃ニナリヌ、又夫ヨリ此所旅宿着岸ノ便ヨリ、諸方往還ノ津トナリテ、民家甚タ繁昌セリトナリ。

もとより、この文は後世に書かれたものであり、その信憑性は不確かであるが、桑名の都市形成の様子を的確に表現している。最初は3つの州崎に分かれていたが、やがて一体化して桑名三ヶ村と称するようになった。また諸方から船が来る港として発展して、繁栄するようになった。

桑名は三大川と伊勢湾に開かれた港であるとともに、背後の鈴鹿山脈を通じて近江、さらに京都とも結ばれている位置関係にある。水運の初見は応永29年(1422)で、この年から翌年にかけて、鎌倉円覚寺正統院造営用材が美濃の上流から筏で下流へ送られている。

この文書では桑名の地名は記載されていないが、同 31 年の文書では「桑名より海上を下され候」（「円覚寺文書」）とあり、桑名を経由して美濃の木材が鎌倉まで送られている。

桑名が港として発展する背景として伊勢神宮との関係が大きい。寛正 4 年（1463）に内宮造営の費用を桑名の願太郎左衛門に預けていたところ、焼失したので、返せないという事件がおきている。同年には神宮の上分米を桑名船にて積み出したが、途中にて海賊に押留された事件もあった。

一方、陸路の近江との関係では、長禄元年（1457）に近江商人が桑名に近い員弁郡山田にて商取引上のトラブルを起こしている。これ以後にも近江商人が桑名で商取引をしている記録は多いが、かれらは紙・木綿・陶器・塩・魚類・布など、美濃・三河・尾張・伊勢地方の特産品を桑名で仕入れている。即ち、これらの商品は三大川や伊勢湾を通じて桑名に運ばれてきたものである。

水陸の接点として経済的発展をとげた桑名は皇室領であった。戦乱が続く時代であり、永正 7 年（1510）近くの豪族・長野氏が桑名を占領せんと侵入してきた。これに対して桑名の町衆（商人）たちは逃散をもって対抗し、桑名での経済活動は停止した。その結果、伊勢湾内の流通が麻痺し、伊勢神宮は非常に困惑して、再三長野氏へ撤退を呼びかけ、2 年後に長野氏が桑名から撤退して解決した。このような事件は天文 7 年（1538）、永禄元年（1558）にも起きている。このように桑名の町衆たちは、武力に負けぬ結束力を持ち、自分たちで町を治める都市の自治を確立していた。

桑名の商業活動は「この津は諸国商人が罷り越し、何の商売をすることも自由であり、昔から十楽の津であり」（『今掘日吉神社神社文書』）、自由都市である。自治都市・自由都市を兼ね備える特異な都市として、桑名は発展した。

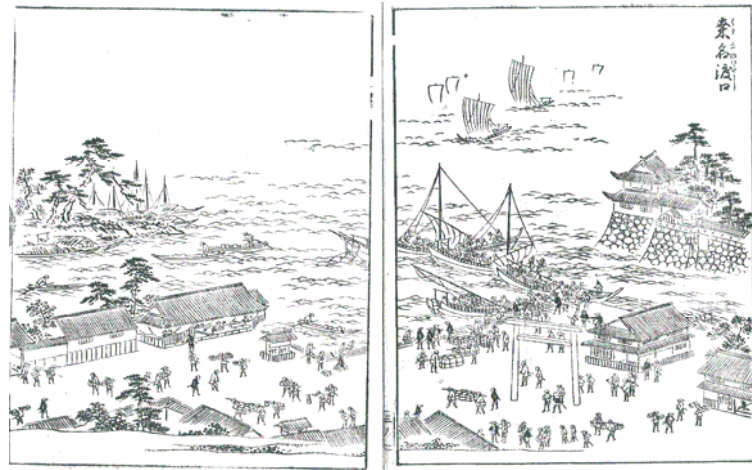
その頃の文献には「桑名三ヶ村 我持ノ時」（「桑名旧記」）とある。「我持ノ時」とは自治を意味すると思われるが、当時の桑名には樋口・矢部・伊藤の 3 人の有力者が館を構え、その下に三十六人衆が居た。彼らが共同して自治を担っていたと思われる。

2. 物資流通と東海道の港として

織田信長・豊臣秀吉・徳川家康という巨大な武力のもとに桑名の町衆も組み込まれた。慶長 6 年（1601）、領主となった本多忠勝が城下町の再開発（慶長の町割＝後述）、城の建設を行なったが、しかし従来から住んでいる町衆は高い土地を譲らず、城は町よりも低い位置で、風下の土地に作られた。

江戸に幕府が開かれ、江戸が日本の中心地となった。それに応じて多くの物資が江戸へ送られるようになった。美濃には幕府領・旗本領が多く、そこからの年貢米は三大川を通じて桑名へ集積され、桑名から海上を江戸へ運ばれた。川船と海船とでは大きさが違うため、どうしても河口の港で中継する必要があった。諸物資も米と同様にして桑名を中継港として運ばれた。また三大川上流からは木材が筏で流されてきて、桑名からは船に積まれて各地へ運ばれた。特に伊勢神宮の遷宮用材は木曾山から木曾川を下り、桑名で溜められて、まとめて伊勢神宮へ送られた。

一方、瀬戸内から塩が運ばれてきて、桑名で小分けされて三大川上流へと運ばれた。桑名では廻船問屋、倉庫業者、米問屋、材木業者、塩問屋などが多くできた。



【江戸時代中期の桑名港＝七里の渡し場】（『伊勢参宮名所図会』より）

また、慶長6年には東海道宿駅制度が定められ、桑名は宿駅になるとともに、宮宿への海上輸送の拠点「七里の渡し場」となった。渡船は天候によって欠航することもあり、また慶安4年（1651）の由井正雪の乱以後は夜間通行禁止となったので、桑名宿に宿泊する旅人も多くあった。天保14年（1843）のころには東海道の宿駅のうち、旅籠屋がもっとも多いのは宮宿であるが、2番目は桑名宿である。七里の渡しの両方で1、2位を占めている。宿泊客が多いことは旅籠屋が多くなると共に青物問屋、魚問屋など関連業者も多くあった。宿場町・港町なので女郎も当然ながら居た。なお宮宿への七里の渡しのバイパスとして、桑名と佐屋を結ぶ三里の渡しもあって、天候不良の際によく利用された。

朝鮮通信使は桑名を通らなかったが、琉球の使節は当初は桑名を通った。しかし寛文11年（1671）に江戸から帰国する途中に七里の渡しで遭難したので、以後は桑名に立ち寄りなくなった。しかしオランダの使節は幕末まで桑名を通っており、桑名に文化的影響を大きく与えた。

桑名はもとより本多・松平などの大名が支配する町であったが、桑名港の活動を中心とした町衆は町年寄を組織し、一定の自治権を保っていた。桑名藩では財政難のため、町衆にしばしば御用金を課したが、個々に応じるのではなく、町衆たちは御内用会所を組織して一括して応じるようになった。それだけ町衆の力が強かったことを示している。この御内用会所は明治になって桑名銀行（現在の百五銀行桑名支店）に発展した。

3. 幕末から近代化へ

米の積み込みは当初は蔵前と呼ばれる船馬町河岸に大型船が直接着船したが、三大川上流からの土砂が流れてくるので、桑名港は次第に浅くなってきた。寛政ころ（1789～1800）からは下流の浜地蔵の浜に着船するようになった。しかし、そこも浅くなり、後には沖合に大型船は停泊し、舢舨で積み込むようになった。

明治維新の戊辰戦争で、桑名藩は敗北したが、町衆の商業活動は衰えず、明治初年の桑名港は相変わらずに賑わった。しかし、明治3年（1870）には四日市と宮の間に蒸気船による定期航路が開かれ、さらに明治5年に東海道宿駅制度が廃止となり、桑名を通る旅人が次第に減少して、大きな影響を受けた。

美濃方面からの物資は従来通りに三大川を通じて桑名港に運ばれてきた。明治5年の『岐阜県統計書』によれば「勢州桑名湊の他には津出し便利の湊はない」と言われ、岐阜県（美濃）の外港としての役割を果たしていた。しかし桑名港には大型の蒸気船が入港できないので、その代替として隣の四日市港が開発され、明治3年には四日市－横浜間の蒸気船による航路が開かれた。それでも桑名港は従来型の和船による運航が続けられて、貨物取扱量は明治10年代前半までは四日市港よりも多かった。

京都から東京へ遷都されたことにより、京都と東京間を移動する人が増えたが、京都から東海道を四日市まで来て、四日市から船で横浜へ行くのが、最も早い方法であった。そのため四日市－横浜間の運航は次第に増えた。明治8年三菱汽船、12年三井物産、16年共同運輸、18年三菱汽船と共同運輸が合併した日本郵船が貨客船を運航し、貨客とも明治10年代後半には桑名港をはるかに越えた。

【桑名港と四日市港の比較一年間移出額(単位:万円)】

明治年	桑名	四日市
11	234	219
16	783	634
21	295	1,525
26	245	1,646
31	272	3,751

出典：各年度『三重県統計書』より作成

海上交通では桑名港の地位は低下したが、河川交通は依然として活発であり、上流の大垣・岐阜・笠松との間には貨客船が運航された。とくに大垣と桑名間は明治15年に小型蒸気船による定期航路が開かれた。22年には東京－神戸間に東海道鉄道が開通したので、桑名から汽船で大垣へ行き、大垣駅から鉄道を利用すれば、東西への旅が非常に便利になった。また桑名と大垣間の沿岸に寄港する船もあり、沿岸各地と桑名港が結ばれていた。大正8年（1919）に桑名－大垣間に養老鉄道が開通するまで通船が続いた。

明治初年から桑名の町衆は近代化に、いち早く取り組んでいる。明治4年に郵便局、7年に洋風3階建ての小学校および公立病院、11年には洋風木造の電信局、12年に洋風2階建ての警察署など近代的な設備・建物が出来ている。8年の地価調査では港のある川口町が最高に高く、東海道の町々が続いて高い。



【明治初期の桑名港】



【昭和初年の桑名港】

出典：「写真集 明治大正昭和 桑名」、図書刊行会発行より

船舶の大型化に次いで桑名港に影響を与えたのは、三大川の改修である。三大川は下流では互いに入り組んで流れており、その間を縫うようにして船が往来できて、桑名港に集中してきた。しかし三大川が分流していないので、沿岸では洪水が絶えずに起きた。そのため、明治政府は三大川分流工事を明治 20 年から実施した。分流で夫々の川が堤防で区切られ、お互いに往来できなくなり、揖斐川に面している桑名港は長良川・木曾川とは直接結ばれなくなることになった。その対策として水位の違う木曾川と長良川の間に閘門を設けて、船の往来を可能にした。

だが、決定的な影響を与えたのは鉄道の開通であった。明治 27 年関西鉄道の桑名駅が開業し、翌年には名古屋と結ばれたことにより、細々と続いてきた七里の渡しの渡船も閉鎖を余儀なくされた。渡船に従事していた赤須賀の船乗りたちは、紀州通いに活路を見出した。紀伊半島は陸路が不便で、陸の孤島といわれていた。ここへ日用雑貨品を積んで行き、帰り便には海産物や林産物を積んで桑名や名古屋へ持って来た。この船を「赤須賀船」と言っている。

昭和 5 年(1930)には桑名港は指定港湾とされた。4 年の統計では三重県内の港のうち、四日市港、鳥羽港について 3 番目に多い取扱高である。昭和の戦時中に多くの船が徴用されて赤須賀船も衰退したが、戦後は復活した。27 年には地方港湾に指定された。赤須賀船は、国鉄の紀勢本線が全通する昭和 40 年代前半までは続けられた。現在も指定港湾のままだが、移出は無く、水産物の移入が僅か記録されている程度である。

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 船を用いた交易・交流活動によって運び伝えられ、育ってきた「みなと文化」

(1) 住吉神社

正徳5年(1715)に海上安全のため勸請された。現存している天明8年(1788)建立の石造常夜燈は長良川上流の美濃富永郷の住民が寄進したもので、「渡海安全」と刻まれている。明治28年建立の石造狛犬一対は、発起人が阿波国の住人と桑名塩問屋井上喜兵衛であり、寄進者銘によれば、木曾川上流の笠松、瀬戸内海沿岸の備中・備前・阿波の船持、徳島の陶器商組合・灰商組合、名古屋の人など桑名港と船運で結ばれていた各地の人々であり、交易の広がりを示している。

(2) 絵馬

走井山勧学寺本堂に大きな絵馬が掲げられている。風化しているので、図柄は不鮮明になっているが、3本マストの西洋型帆船である。年号も読み取れない。この本堂は元禄ころ(1700)の建築であり、その当時に寄進されたものかもしれない。桑名港とかかわりのある人の寄進であろう。

(3) 豪商

江戸時代に桑名を代表した商人は山田家である。この山田家は木曾川で運ばれてきた木材を扱って財産をなした商人で、のちに金融業者となり、江戸・大坂などにも店を構えるほどになった。各地の大名に貸金していたが、桑名藩では米を担保として借りていたので、収穫時には年貢米が藩の蔵でなく、山田の蔵に船で直接に納められた。その屋敷は明治初期に、新興してきた諸戸清六に買い取られるが、建物は一部が現存し、国指定重要文化財になっている。

2. 交易による流通市場の形成によって育ってきた「みなと文化」

(1) 廻船問屋・蔵宿

三大川と伊勢湾を結ぶ中継港であるため、廻船問屋や蔵も多く見られた。それを示す具体的な資料は散逸しているが、美濃方面の荷物を取り扱った記録は岐阜県の各地に残っている。幕府米は桑名港から積み出す際に、美濃の村々からの代表者も立ち会うために、桑名の辰巳屋を定宿としていた。やがて辰巳屋は村々の代理人になっている。なお桑名港では大きな船持ちは居らず、主に知多半島からの船が寄港した。

(2) 米会所

三大川上流から送られてきた幕府米や旗本米は、最初は桑名から船便で江戸へ送られたが、輸送上のリスクを考えると桑名で売却されるようになった。そのため桑名には米を売買する米会所が天明4年(1784)に出来た。ここでは先物取引も行なわれ、全国的にも注目される米市場となり、電信・電話が普及するまでは旗振り通信により、各地へリレー式に相場の値段が伝えられた。明治以降米穀取引所となって、昭和6年まで続いた。

（３）倉庫

三大川上流から運ばれてくるものの中で最も多いのは米であり、川船と海船との積み替えのため、一時的に保管する蔵が船馬町河岸に立ち並んだ。そのため船馬町の別名は蔵前と呼ばれ、桑名でも最も裕福な商人が住む町であった。

明治になって桑名随一の資産家になった諸戸家は大地主であり、小作米を収納する煉瓦造り倉庫 5 棟を揖斐川の入り江に面して建てた。そのうち 2 棟が昭和 20 年の米軍の空襲により破壊されたが、残り 3 棟は現存している。

（４）船会所・船番所

桑名港は東海道の渡し場であったため、宿駅制度の一つである船会所が設けられ、渡船の手配・旅人の受付を行なった。また入港船から入港料を徴集していた。ここは町衆のなかの船年寄が責任者となり、数人の職員がいた。また桑名藩の役人が常駐する船番所が設けられていて、渡船を乗り降りする旅人を監視していた。

3. 航路ネットワークを利用した地場産業の発達によって育ってきた「みなと文化」

（１）漁業

淡水と海水が交わる桑名港付近は漁業資源が豊富であり、中でも貝類は古代からの特産品であって、朝廷にも牡蠣が献上されている。江戸時代からは蛤は幕府への献上品ともなった。旅人には「焼蛤」として賞味され、「おっとその手は桑名の焼蛤」と人口に膾炙された。蛤は生ものであるが、それを煮締めて、長持ちさせることを桑名の町衆が考え出して、「時雨蛤」のネーミングで売り出し、街道の土産物として各地に持ち帰られた。

（２）木製品

桑名港は三大川の上流から運ばれてくる木材の集散地であるが、その木材を利用した木製品が特産品として作られた。それは家具・仏壇、盆などであった。とくに大型の製品には船運が非常に役立った。現在でも伝統的木工家具の指定を受けている製造業者が存在する。また盆は桑名盆と称され、特殊な塗り（いじいじ塗り）が施され、桑名名物の一つとして旅人に土産物として各地に持ち帰られた。またオランダ使節の一行に買い求められ、海外貿易品ともなった。

（３）醸造業・食品加工業

桑名では清酒の醸造も盛んであったが、味噌・醤油溜の醸造も盛んであった。原料の塩は船便で運ばれてきた。醤油溜は特産品の「時雨蛤」を煮締めるための調味料であり、桑名では特別に作られた。清酒や醤油溜は液体であり、且つ重いため船運が使われた。素麺や饅頭も桑名の特産品であり、これらの食品は明治以降に熊野方面へ船運で多く送られた。

（４）萬古焼

萬古焼は桑名船馬町の商人・沼波弄山が考案した陶器である。彼は商人として京都で修業したが、その傍らに茶道と京焼を学んだ。桑名に戻り、元文ころ（1736-40）に窯を築き、趣味として焼物を始めて萬古焼と称した。京焼風であるが、異国風な図柄を描き、デ

ザインの一部としてアルファベット文字さえも取り入れた。当時は享保改革の時代で異国の文化が憧れられた時代であったので、萬古焼は東海道を通る旅人によって広まっていった。彼は江戸にも店を持つ町衆であったが、江戸でも萬古焼の評判が良く、晩年には江戸小梅の別邸に窯を築き、作陶した。原料の土は桑名近郷の小向山の土が使われたので、その土が桑名港を通じて船運で江戸へ送られた。

（５） 鋳物

桑名城主の本多忠勝は桑名城建設の際に、鋳物師広瀬氏を招いて屋敷を与え、藩の御用を務めさせた。のちの城主松平定綱も鋳物師辻内氏を招いて屋敷を与えた。辻内氏の屋敷は揖斐川に面しているが、鋳物は原料・製品とも重量物であるから、桑名港の船運が大いに役立ったことを物語っている。

４． 港を介して蓄積された経済力に基づき、人々の生活の中で育ってきた「みなと文化」

（１） 料亭・廓

港町・宿場町であるため、女郎衆が多く居た。江戸時代には「勢州桑名に過ぎたるものは二朱の女郎に銅の鳥居」と言われて、桑名女郎は東海道の旅人に知られた。明治 19 年の『三重県統計書』では娼妓の数は、伊勢神宮のお膝下の山田よりも多く、三重県では一番多い。

江戸時代の本陣であった建物は明治に改造されて、高級料理旅館「船津屋」となったが、多くの貴賓・文人が泊まった。昭和 20 年の空襲で建物は焼失して新しくなったが、今もなお桑名随一の高級料亭として営業している。また現在も多くの芸妓が活躍しており、宿場町・港町の情緒を今に伝えている。

（２） 文人の来遊・俳諧

室町時代から東西を行き来する文人は桑名港を利用していることは数えきれない。連歌師宗碩は大永 2 年（1522）、桑名を訪れ、上述の三か村の有力者の 1 人である矢部氏の館に留まり「さののわたり」という紀行文を書いている。連歌師宗長が大永 6 年に桑名に来た時には「飛ほたるもゝ舟のとまる芦火かな 此津南北、美濃・尾張の河ひとつに落て、みなとのひろさ五・六町、寺々家々数千間、きこゆる西湖ともいふべし。数千艘はしの下ひろく、旅泊の火、星か河べのなど、古ごともさながらにぞ見へわたる」（『宗長日記』岩波文庫版）と桑名港の繁栄ぶりを活写している。その他にも連歌師の宗牧が天文 13 年（1544）、里村紹巴が永禄 10 年（1567）に来桑している。

松尾芭蕉や滝沢馬琴、井原西鶴、大高源吾、司馬江漢など、江戸時代には東海道を通る文人は数えきれない。ツンベルグやシーボルトなどの西洋人も桑名を訪れて紀行文を残している。

明治時代には北原白秋も来ているが、上述の船津屋には、泉鏡花が明治 42 年に泊まり、その情景を背景にした小説『歌行燈』が発表されている。久保田万太郎も船津屋に泊まり、鏡花の原作から戯曲『歌行燈』を書いて、昭和 15 年に発表している。杉本苑子の出世作『弧舟の岸』は、彼女が桑名に滞在して書き上げた作品である。

俳諧結社「間遠社」がある。これは美濃の各務支考の弟子たちが桑名で立ち上げた結社である。18世紀初期に始まり、200年ほど続いた歴代の10人の社長（代表者）は桑名町衆または僧侶である。桑名の文化を代表する組織であったが、昭和18年に最後の社長・千葉兎月が病死して、折からの大戦中のため立ち消えてしまった。

（3）石取祭

桑名の文化を語る上で最大の象徴は石取祭であり、それは桑名町衆の経済力と自治力により支えられている。桑名町衆の氏神である桑名宗社（通称春日神社）に関係する祭事である。その起源は明確ではないが、江戸時代初期に始まる。春日神社の大祭に備える境内整備のために、近くの町屋川から小石を運んだのが起源らしい。町屋川は約4km離れているので、当初は舟で運び、桑名港で陸揚げしていたようだ。後には東海道を荷車で運ぶようになり、3輪という特異な形態の祭車で運んだ。旧暦の7月（現在では8月）の行事であるため、日中は暑いので夕方からの行事であり、提灯をつけて、大きな太鼓を敲き、鉦を鳴らして、川原から神社までを運んだ。各町に1～2台の祭車があり、祭車はそれぞれ彫物・天幕などに趣向をこらして、各町で競い合っている。桑名の町衆は僅か2日間の石取祭のために1年を働いたと言われる。

現在でも毎年40台近くが参加している。太鼓と鉦が一斉に鳴り響き、日本一喧しい祭と言われる。平成19年（2007）には国指定重要無形民俗文化財に指定された。この祭の一つの特徴は祭事に関することは、すべて町衆の自治によって取り扱われることである。祭事によって生じた喧嘩・紛争は警察に頼ることなく、自分たちで解決している姿勢は、現在でも保たれている。現在は毎年8月第1日曜を本楽とし、前日の土曜日の午前0時の「叩き出し」で始まり、本楽の午後12時ころまで、48時間行われる。

（4）石取会館・桑名市博物館

上記の石取祭の祭車が1台桑名市に寄贈され、昭和初期に建てられた銀行の建物を利用した石取会館で常時展示がなされている。その祭車は個人蔵であったが、江戸時代末の建造であり、祭車の変遷を知る上でも貴重な資料である。会館では写真・ビデオによる展示もあり、太鼓を叩く体験も出来る。

桑名市博物館は市民の1人から桑名藩に関する古美術品の貴重なコレクションが市に寄贈されたことがきっかけとなり、開設されたものである。その後も数々の寄贈が寄せられている。特別展を除いて入館無料であるのも、多くの市民の寄贈で成り立っているからである。年間10回ほど展示替えがあり、小人数の館員ながら、その都度趣向を凝らした展示を行い、リピータが絶えない。

5. 港を中心とする社会的・経済的営みの総体として形成されてきた「みなと文化」

（1）七里の渡し場跡

江戸時代の東海道の七里の渡し場跡は、明治時代になっても貨客船の発着場として使われたが、次第に客船はなくなり、貨物港になったことは前述した。そのため岸壁など変化はあったけれど、江戸時代からの風情を残していた。昭和33年に三重県指定史跡となった。34年の伊勢湾台風の後の護岸堤防工事について種々の議論があり、人命尊重のために

渡し場跡を埋めて、巨大な堤防を造る案が、当時の建設省から示された。しかし、文化財関係者をはじめ、桑名市当局者の努力により、埋め立ては免れて、防潮壁を張り巡らして、渡し場跡は壁の外に残された。そして巨大な水門も作られた。その後、かさ上げがなされて、水面よりもかなり高くなったが、渡し場の位置は失われなかった。

地盤沈下などで、さらに巨大堤防が必要となり、その建設案が建設省から出され、渡し場跡も幾つかのプランが示された。そのうち渡し場跡は現状保存となり、沖合いに堤防を造り、付近一帯の整備は平成 18 年に完成した。その時には防潮壁と巨大な水門も取り払われた。前面の景観は悪くなったが、東海道の渡し場としての位置が保存された。

（２）赤須賀地区（漁港）の家並み

赤須賀地区は江戸時代以前から漁師が集団して住んでいる地区である。江戸時代から狭い土地に家が建て込んでいたので、獵師町と呼ばれた。明治の三大川改修工事で、一部の土地が削られ、一段と密集した集落となった。昭和の戦災で壊滅したが、戦後の復興でも依然として密集した集落である。猫が道路を跳び越せるほど狭い道路であることを称し、「猫飛び町」と言われる。漁業者は次第に減少しつつあるが、現在も早朝より漁に出かけ、帰ると港の市場では活発なセリ市が行われる。現在は高潮対策を兼ねて港の改修工事中である。

（３）慶長の町割

慶長 6 年(1601)本多忠勝が桑名城に入城するや、従来からの町の大改造を行なった。これを「慶長の町割」と称している。七里の渡し場である港と続く東海道、春日神社を中心とした町衆の町が形成された。昭和 20 年 7 月の桑名空襲まで、ほぼ原型が保たれていたが、戦災復興のため新しい広い道路が出来たので、一部は面影がなくなった。しかし、今も狭い路地など原型を偲ばせている。

（４）歴史的建物

港付近の建物は前述の戦災により、殆ど焼失してしまった。ただ江戸時代の豪商山田家（現在の西諸戸家）と隣接する東諸戸家の住宅は戦災の被害が一部であり、両家とも大部分が現在まで残っている。西諸戸家の建物は江戸時代の建物に、明治時代に増設された部分も含めて、国指定重要文化財になっている。現在は財団法人諸戸会の所有となり、春秋に一般公開されている。東諸戸家の住宅は明治末から大正に建てられたものであり、西洋館と和館が接続して建てられている。設計は日本近代建築の父である、ジョサイア・コンドルである。コンドルの作品は関東に多く、箱根から西で残っているのは、東諸戸家のみであり、非常に貴重な存在である。平成 9 年には国指定重要文化財となった。現在は桑名市の所有となり、「六華苑（ろっかえん）」と称して、常時一般公開している。部屋の一部は貸室として、市民の文化活動に利用されている。



【現在の七里の渡し場跡】



【西諸戸家のレンガ作り倉庫】

第3章 「みなと文化」の振興に関する地域の動き

かつては交通の要として活躍した桑名港も、現在では指定港湾になっているものの、僅かに漁港として命脈を保っているに過ぎない。しかし、七里の渡し場跡付近が整備され、近年では観光化を目指した動きが活発である。

揖斐川堤防や水門の整備、桑名城の一部である揖斐川沿いに隅櫓（蟠龍櫓）が平成15年に完成し、さらに七里の渡し場跡付近の整備が18年に完成した。近くには無料駐車場や観光案内所もできた。桑名港付近には国指定重要文化財のある六華苑や西諸戸庭園、さらに桑名城跡を含めて、観光名所が集まっており、桑名の大観光地となった。

これらの観光地を案内する「歴史の案内人」（ボランティア・ガイド）も設けられ、好季節には大繁盛の盛況である。忙しくなればなるほど、彼らは学習に励み、人材は質量ともに充実してきた。このような動きが、桑名の文化振興に役立つであろう。

港の機能としては定期的な人・物の動きはないが、日本では珍しい大河の景観を楽しんだり、往時の七里の渡しをしのぶ船旅をするために、民間人による「くわなりバー・クルーズ（株）」が設立され、不定期ながら、クルージングが行われるようになった。堤防の下にある岸壁までスロープも設けられ、障害者や高齢者の方にも船遊が楽に楽しめるようになった。

七里の渡しの対岸である名古屋市熱田では、NPO 法人が七里の渡しに定期的な船の運航を目指して、試験的な運航が続けられている。今後は桑名と熱田と双方の団体が共同して七里の渡しを復活して、お互いに港付近の活性化がなされることが期待される。

木曾・長良・揖斐の三大川を公園とする構想が建設省（現在は国土交通省）によって始められ、上流部・中流部はすでに完成しているが、下流部での検討が行われている。平成21年11月に第1回国営木曾三川公園（仮称）七里の渡地区基本設計検討委員会が発足した。

桑名港の中心である七里の渡地区をどのように保存し、かつ開発していくかを定めることになっている。

実現までには年月がかかるが、港を中心として発展してきた桑名を後世に継承できることになろう。